

# 序

OTC医薬品は、国民の税金や保険料を使って行われる医療と違い、基本的に全額自己負担で使います。そのため、たとえ根拠に乏しいものや、あまり効果が期待できないものであっても、使う人の希望や好みを優先して販売することも選択肢の1つです。

しかし、これはOTC医薬品の販売に関わる薬剤師や登録販売者が、薬の有効性や安全性に関する科学的根拠を軽視してよいということではありません。特に、期待できる効果のわりに「副作用のリスクが高い薬」や「値段が高い薬」を勧めてしまう行為は、薬で体調を良くしようと考えている自分の顧客に対し、体調を悪化させたり不必要な出費を強いたりすることに繋がってしまいます。「薬の専門家」として、より安全で効果的な薬の使い方を提案するためには、パッケージの雰囲気やテレビCMで流れるフレーズ、説明書だけで商品を比較するのではなく、その商品に配合されている個々の成分について有効性・安全性の根拠を踏まえ、目の前の顧客がその薬を使うことは本当に有益かどうかを考えるとというステップが大切です。

そこで、本書ではOTC医薬品を「有効成分」という切り口で比較・使い分けができるように、20の主要なカテゴリについて約800点の参考文献をもとに、各成分の長所・短所や類似薬との違い、使い分けを考える際に役立つフローチャート、さらに現場でよく出会う117個の「クリニカルクエスション」をQ&A方式でまとめました。また、OTC医薬品の販売に際しては「医師の診察を受けていない人」の対応が基本になることから、緊急性の高い疾患を見落とさないための「病院受診のトリアージ」も紹介しています。

OTC医薬品には、医療用の薬と比べても決して効果の劣らないもの、むしろ魅力的な製剤工夫が施されているものがたくさんあります。本書が、「OTC医薬品の魅力を十二分に引き出しつつ、安全で効果的な使い方ができる」ための楽しい勉強の一助になることを願っています。

最後に、本書の執筆にあたり、完成まで2年近くを支えてくださった編集担当の秋本佳子さま、デザイン担当の鳥山拓朗さまをはじめとする羊土社編集部のみなさま、監修の坂口眞弓先生、情報収集に協力して頂いた神田佳典先生に心からの感謝を申し上げます。

2019年10月

児島 悠史

